

学校での「いじめ」が引き金とみられる悲痛な出来事が、また相次いでいる。とりわけ、群馬県桐生市で先月、小学校6年生の女兒が自ら命を絶った事件はいじめとの関連が濃厚だ。母親がフィリピン出身の女兒は2年前に転校してきて、間もなく暴言、冷笑、無視といったいじめに遭うようになった。6年生になると、友達同士がグループで食べる給食の時間も仲間外れにされ、ひとり、ぼつんと食事をしていたという。陰湿ないじめの典型例だが、学校側は当初、いじめの有無は不明だとし、その後、いじめはあったが自殺との関係は分からないと説明を変えている。

桐生市のケースの原因のひとつには、水面下の事態を把握できない教員がなお多いという実情がある。桐生市のケースではクラスは学級崩壊状態で、女兒を孤立させた「給食グループ」も子どもたちが勝手につくったのだという。担任が学級経営のスキルを磨き、異状に目を光らせれば防げる事件は多いに違いない。新しい事実が明るみに出るたびに釈明に追われる桐生市の例をみれば、先生たちの体たらくに暗然とする思いである。

しかし、いじめをそうしたレベルだけでとらえ、対策を施せばいいのだろうか。ことはもっと構造的な、日本の「学校」そのものにも根ざすと考えるのは大げさだろうか。たしかに、およそ人間が集まって過ごすところにいじめや嫌がらせはつきもので、そもそも日本の学校に限った現象でもない。最近では海外での共通する事例も多く報告されている。ただ、日本の場合はいくつかの特徴がある。『いじめの国際比較研究』(森田洋司監修)によると、日本では(1)暴力よりも暴言、無視、仲間外しが目立つ(2)多人数で異質な者、個性的な者をいじめることが多い(3)学級がいじめの舞台になりやすい—という。

日本の学校制度は明治の近代化以降、国のすみずみまで均等な教育を行き渡らせるために中央集権的な仕組みを基本にしてきた。戦後もそれは受け継がれ、地域や現場には限られた権限しか与えられていない。公立の学校というところはなんと「金太郎あめ」であることか。そうした一律性が教育水準の均質化に役立ち、学力の底上げに貢献してきたのは事実だ。しかし一方で、同質性を重んじるあまり異質なものを、「規格」に合わないものを排除しようとする傾向が学校文化には強い。子どもたちのまなざしにも、それは影を落としているだろう。だとすれば、いじめ問題を根源から問い直すために、学校、とりわけ義務教育のかたちをあらためて考えてみるのもいい。その第一歩は、地域や現場に大きな裁量を与え、自由闊達(かつたつ)な学校づくりの試みを文科省などが妨げないことだ。義務教育であっても学校を選ぶ自由、設ける自由をもっと認める必要もあろう。

1) 桐生市のケースの原因のひとつは？

()

2) 日本のいじめの特徴は？3つ記載ください。

()

()

()

3) 日本の学校制度は明治の近代化以降、なぜ中央集権的な仕組みを基本にしてきたのですか？

()

4) 義務教育のかたちをあらためて考えてみる、その第一歩とは？

()